

すみだ郷土文化資料館だより

MIYAKODORI

# みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、  
すみだを舞台にした和歌に登場するなど  
墨田区にゆかりのある鳥です。

すみだ  
郷土文化  
資料館  
SUMIDA  
HERITAGE  
MUSEUM

第73号 2025年(令和7年)12月発行

ふるさととの出会い、ときめきへの旅。

## すみだ郷土文化資料館

131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号

☎(03)5619-7034 ☎(03)3625-3431

電話番号は正確に。

[https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu\\_info/siryu/kyoudobunka/index.html](https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryu/kyoudobunka/index.html)

E-mail [sumida-hm@city.sumida.lg.jp](mailto:sumida-hm@city.sumida.lg.jp)

### ■開館時間

午前9:00～午後5:00 (入館は午後4:30まで)

### ■休館日

月曜日・第4火曜日(土・日・祝日は開館。

祝日に当たる時は翌平日休館)・

12月29日～1月2日

### ■観覧料

個人100円、団体(20人以上)1人80円、

中学生以下と身体障害者手帳・愛の手帳・

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳を

お持ちの方及び介助の方1名は無料



都鳥手鑑(梅柳山木母寺所蔵)

うた

企画展

## 隅田川を詠い、梅柳山木母寺に集う

会期：令和7年12月20日(土)～令和8年2月15日(日)

はるか昔平安時代のはじめ、在原業平<sup>ありわらのなり</sup>が京都から東下の旅の途中、隅田川<sup>うみだがわ</sup>で都鳥に託して京を偲ぶ一首を作りました。『伊勢物語』は『古今和歌集』『源氏物語』とならぶ古典として後世の歌人に読まれ、そのなかの著名歌である業平の一首は広く知られるようになりました。そして、名所としての隅田川<sup>うみだがわ</sup>の地位は、『建保名所百首』(建保3年

〈1215〉成立)によって固まり、京の公家達は遙か東国の隅田川に思いを馳せて、多くの和歌を詠みました。

そんな名所に大きな変化が訪れたのが江戸時代でした。徳川家康が江戸に入り、天下人としての地位を固めていくにつれて、京都の公家の江戸下向が盛んになりました。慶長12年(1607)梅若寺<sup>うめわかでら</sup>に近衛信尹<sup>のぶただ</sup>が立ち寄り、漢字の

梅の一部を二字に分け木母寺<sup>もくぼじ</sup>と名付けて以降、木母寺と称するようになりました。その後、江戸にも和歌文化が根ざし、隅田川は身近な名所として、武士・町人・百姓たちにも広く詠まれるようになりました。

今回の企画展では、隅田川<sup>うみだがわ</sup>と梅柳山木母寺<sup>ばいりゅうざん</sup>にちなんだ和歌と歌人を紹介していきます。

## ●はじまりの『伊勢物語』

在原業平(825-880)は、平城天皇の孫で二歳の時に在原姓を賜り<sup>しんせき</sup>臣籍に降りました。在原氏の五男であったことから、在五中將とも呼ばれました。10世紀後半に現在伝わるものと近い形で成立した『伊勢物語』では、権力を志向せず風雅に親しむ情熱的な主人公として描かれています。

東下の旅路の途中で隅田川を渡る際、「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」と、渡し守に鳥の名を聞き、都鳥との答えに、思い人を都に残してきた切なさを<sup>うた</sup>詠ったのです。隅田川、都鳥、渡し守など、この歌に込められた言葉と想いは、のちの歌人が参照し、またはこれを念頭に和歌を詠んでいくことになりました。

また、業平が渡河した場所は、古代東海道が武蔵国府と下総国府の間で隅田川を渡った先にあった隅田宿付<sup>すだのしゆく</sup>近と考えられています。古代東海道は、現在の東武スカイツリーライン鐘ヶ淵駅南側を通っていました。



図1 「業平公東下之図」(部分)

## ●『建保名所百首』と隅田川

歌枕としての「隅田川」は、平安時代まで武蔵国隅田川の他に、駿河国、紀伊国にもあって、確定的ではありま

せんでした。しかし、建保3年(1215)、順徳天皇主催により、藤原定家・藤原家隆など12名が全国の歌枕(名所題)百か所それぞれに1首ずつ詠んだ歌集が成立しました。これを、『建保名所百首』と言います。ここに武蔵国隅田川が設けられたことで、以降他の国の隅田川と混同されることはなくなりました。歌枕・隅田川の定着という点で、『建保名所百首』の成立は画期的な役割を果たしました。

## ●『夫木和歌抄』と能『隅田川』

『夫木和歌抄』は、鎌倉時代最大の私撰集(天皇の命で編まれた勅撰集、特定の歌人の歌を集めた家(歌)集とは異なり、私的にさまざまな歌を収載した歌集のこと)で、1万7千余首を収めます。ここには、藤原光俊(真観)は、隅田川を渡る際に詠んだ「いほ崎のすミた河原に日八暮ぬ せきやのさとに宿やりゆく」の1首があります。

また、室町時代には、能(謡曲)『隅田川』が成立しました。京都で人買い藤太によって<sup>かどわ</sup>拐かされ、隅田川の畔で死んでしまった天皇の世子梅若丸を探しに来た母・斑女<sup>はんによ</sup>が、1年後の念仏供養の場で「再会」し、後を追って自害してしまった悲劇の物語です。

梅若丸の故地には塚が築かれ、3月15日には法要が営まれるようになりました(現在は、4月15日に行われています)。塚は現在、梅若公園に跡地として保存されています(塚の側にあった木母寺は、昭和53年<1978>に現在地に移転)。



図2 現在の梅若塚

## ●近衛信尹と梅若寺・木母寺

天正18年(1590)豊臣秀吉によって小田原の北条氏が滅ぼされると、徳川家康は国替えを命ぜられ江戸に入りました。関ヶ原の戦いで東軍が勝利し、慶長8年(1603)家康が征夷大將軍に任ぜられると、京都の公家たちも訴訟や願い事で江戸に下向する機会が格段に増えました。戦国時代までは、京都の公家たちにとって、隅田川は遙か彼方の歌枕でしたが、江戸幕府の成立によって、江戸下向が身近なものになったのです。

当時の公家社会に収まり切れない志向を持っていたともされながら、当代きっての文化人であった前関白・近衛信尹は慶長12年(1607)、梅若寺を訪れました。信尹は「木母寺」と<sup>き</sup>揮毫(柳の枝で、とも伝わる)し、以降、梅若寺は木母寺と呼ばれるようになりました。

また、二首の<sup>えいそう</sup>詠草を残しました。「こたへせはわかつてゝこしみやことり とりあつめてもことゝ八ましを」



図3 木母寺の揮毫(梅柳山木母寺館所蔵)



「又戯に きてみるに武蔵のくにの江戸からは 北と東の角田川なり」と。

前者は、住職からの和歌の所望と都鳥が見当たらない状況で「都鳥よ言問いに答えてくれるならば、和歌も出てくるだろう 鳥が集まっても言問いはしないだろうに」と詠んだのでしょう。業平の『古今和歌集』および『伊勢物語』に載る「春の心はのどけからまし」を踏まえたものかも知れません。

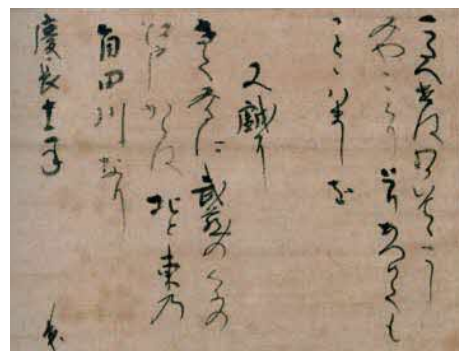


図4 近衛信尹詠草(梅柳山木母寺所蔵)

#### ●道晃法親王の舟遊び

道晃法親王は後陽成天皇の第二皇子で聖護院門跡を務めました(法親王とは天皇の皇子が仏門に入った場合の尊称です)。兄の後水尾天皇は、政治史では寛永6年(1629)に紫衣事件で江戸幕府と対立し、若くして譲位したことで知られていますが、文化史では戦国時代に衰えた朝廷の文事を復興したことが特筆されています(延宝8年<1680>没)。勅撰『類題和歌集』は29368首を誇り、元禄16年(1703)に



図5 道晃・道寛法親王詠草

出版もされました。

道晃法親王は、後水尾上皇歌壇で大きな役割を果たし、古今伝授も受けています。後水尾天皇第12皇子道寛法親王と寛永15年(1638)江戸に下向し隅田川で幕府の饗応を受け、それぞれ1首残しています。

道晃「帰るさの関屋の里にやともあれな 角田河原のあかぬなかめに」道寛「ミヤこ鳥なにことと八む古郷もわするはかりのけふの舟路に」

#### ●版本「隅田川和歌集」

江戸では、寺社参詣が盛んになり、寺社の由来を書いた縁起を木版刷り



図6 「隅田川和歌集」

で参詣者に配りました。木母寺でも、縁起を配っています。さらに、隅田川の和歌50首を39世典海が、頒布しています。

ここには、業平、源頼政など勅撰集に採られた歌だけでなく、近衛信尹や道晃・道寛法親王の和歌も入っています。典海も最後に「すみた川代々に流れし寄人の 言の葉かへてうつすおもかけ」と木母寺で隅田川和歌が読み継がれてきた意義を歌にしています。

江戸最初の地誌『江戸名所記』には、木母寺が多くの参詣者で賑わった様子が描かれています。そのような人びとに、この二つの版刷りは広く愛好された様子が目に浮かびます。

#### ●都鳥手鑑の世界

『慶長見聞集』には、当時の木母寺住職について、興味深い挿話が記されています。江戸下向の公家が木母寺を訪れた際に、短冊を差し出して和歌を所望する、と。現在の木母寺には、「都鳥手鑑」と称する短冊を貼り付けた折本が2冊伝わっています(表紙)。錚々たる歌人が歌を奉納しており、いかに木母寺が公家や武士、そして和歌を詠みはじめた一般の人びとの憧憬の地であったかがうかがえます(表1)。歌には業平以来の隅田川古歌を意識したものと、梅若丸の故事を念頭に置いて詠んだものがあります。江

表1 「都鳥手鑑」所収のおもな歌人

番号	歌 人	詠 歌
1	田村四郎兵衛	角田川むかしを思波のうへに 面影うかむ城鳥かな(延宝2年<1674>)
2	木母寺39世典海	隅田川よ、になかれし歌人の ことのはそへてうつすおもかけ
3	梶井盛胤法親王	こと、はん鳥たにすまていと、しく 都にとをきすみたかハかな
4	萬殊院良尚法親王	しるしにとうへし柳も枯はて、 あはれはかりハのこる古塚
5	難波宗量卿	鳥の名のミヤこわすれて角田川 はや瀬にあかすうたふ舟人
6	冷泉為景卿	立かへる日かすハけふかあすた河 都鳥にも事ハとはしな
7	四條隆音卿	いさといはんれかその名のミヤことり すみた川にしすミなる、とも
8	水無瀬氏成卿	名にしほふたよりおもハ、都鳥 われに事とへとハ、こたへん
9	伊達陸奥守吉村朝臣	あはれなり幾世の秋のふるつかに 朽木の屋なき残るしは(享保13年<1728>)
10	池田伊予守綱政朝臣	世々□ふり梅ハかはらぬ形見にて はるをとふらふ野への古寺

戸の地誌類には、念仏参りの際の盛大さを記したものに事欠かないですが、実際に訪れてみると塚と柳の寂しい情景に感銘を受けた、といった内容もあります。

●冷泉為村の隅田川周遊

冷泉為村は、父・為久とともに江戸時代中期に幕府との関係を緊密に保ち、関東に多くの冷泉家門人を獲得しました。

為村は元文5年(1740)、隅田川で舟遊びを行い、木母寺を舟から眺めました。随行した成島和鼎に為久は京都から礼を込めて一首送っています。「聞きわたるめくみも広しすミタ河まれのふなちの春のあそひそ」と。

この周遊は、文化8年(1811)和鼎の孫成島司直によって「隅田川春遊絵巻(春のみふね)」と題する絵巻にまとめられました。

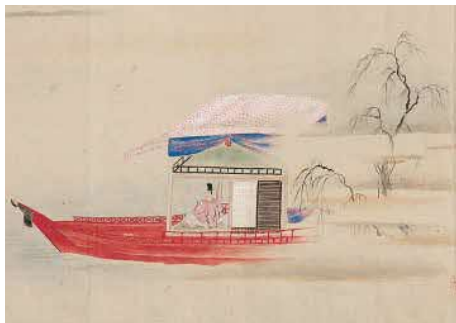


図7 「隅田川春遊絵巻」(部分)

●町奉行所与力笠原孟懿

笠原孟懿は町奉行所与力を務めながら、石野広通と交流を深めました。石野広通は江戸堂上派で中心となって活躍した、同じく町奉行所の与力でした。江戸堂上派とは、京都の公家と交流を深めながら研鑽を積んだ一派で、国学系統の江戸派とは一線を画した集団です。賀茂真淵や本居宣長が属する江戸派に現代では関心が集まりがちですが、江戸時代では江戸堂上派が門人数では大きく上回っていたとされています。

孟懿は友人の景興(不詳)と寛政8年(1796)、隅田堤の花見に出掛け、木母寺に立ち寄ります。木母寺は大きな松が知られていましたが、同じく咲き誇る庭桜を「松かえもふりぬる寺の庭さくら 屋の外なる色とこそミれ」と詠みました。

また、屋台で酒と肴を楽しみ、さらに一首「くミかへよミちのつかれもしら魚を ミさかなよせし春のさかつき」。こうなると、もはや狂歌ですが、江戸時代初期には公家文化から始まった和歌の嗜みが、町奉行所与力が日帰りの遊びの際に絵巻を作るまでになったことに、注目したいと思います。

●国学者加藤千蔭と向島百花園

国学者として知られる加藤千蔭も笠原と同じく江戸町奉行所与力でした。賀茂真淵に入門し、「県門四天王」の一人に数えられています。千蔭は笠原とは異なり、国学への造詣を深め、本居宣長とも交流がありました。万葉調の歌を範とするなかで、向島百花園のパンフレット「武蔵第一名所角田河絵図並古跡附」にも大きく、「すミタ河堤にたちて舟きては 水上遠鳴子規」と取り上げられています。

●おわりに

修善(不詳)が編んだ弘化3年(1846)成立の「隅田川花景一望全図」には、桜樹に短冊を提げて和歌を読んでもらう様子が描かれています。和歌は1300年の歴史を持つわが国を代表する文化の一つですが、木母寺と隅田川は、和歌の歴史の長さを感じることが出来る貴重な場所であるといえるでしょう。そしてそれは、堂上の公家文化が、武士や庶民にまで広がっていったことと同義でもあるのです。

○参考文献 『歌ことば歌枕大辞典』(角川学芸出版、2014)、『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、2019)。

(資料館学芸員 福澤 徹三)

表2 木母寺と隅田川和歌の関連年表

番号	時 期	内 容
1	10世紀後半	『伊勢物語』成立。在原業平が隅田川を渡河し「名にしおはば…」と詠ったと伝わる。
2	建保3年(1215)	『建保名所百首』が成立し、武蔵国隅田川が歌枕(名所題)として定まる。
3	延慶2年(1309)～3年	『夫木和歌抄』成立。康元元年(1265)藤原光俊(真観)の詠歌が収載。
4	15世紀前半	世阿弥の子・観世元雅が謡曲「隅田川」を作る。
5	文明17年(1485)	『梅花無尽蔵』に隅田川河畔の柳を植えた塚が梅若丸の墓所との記述がある。
6	慶長12年(1607)	近衛信伊が梅若寺を訪れる。「木母寺」と揮毫し、以降寺号が改まる。
7	寛永年間(1624-1644)	「都鳥手鑑」に水無瀬氏成・冷泉為景等の短冊が見られる。
8	寛永15年(1638)	道晃・道寛法親王が江戸幕府から隅田川で舟遊びの接待を受ける。
9	延宝年間(1673-1681)	木母寺39世典海により、版刷り「隅田川和歌集」が成立する。
10	延宝7年(1679)	高崎藩主安藤重治が木母寺に「梅若権現御縁起」を奉納する。
11	元文5年(1740)	冷泉為村が隅田川で舟遊びを行う。文化8年(1811)成島司直によって絵巻が成立する。
12	安永8年(1779)	三島景雄の主催で角田川扇合が行われる。加藤千蔭が参加する。
13	寛政8年(1796)	町奉行所与力笠原孟懿が花見で隅田堤を訪れ、木母寺で遊ぶ。